

「五十戸」の表記がみられる荷札で、「種田」の地名は『倭名類聚抄』には認められない。また荷札上端の切り込み部分だけでなく、表面にも紐の痕跡が残されており、貢進する荷物にかけた紐に挟み込んで使用されたことがうかがわれる。

なお、木簡解読については平城宮跡発掘調査部史料調査室の御指導と御援助を受けた。さらに佐藤信氏には種々の御教示をえた。

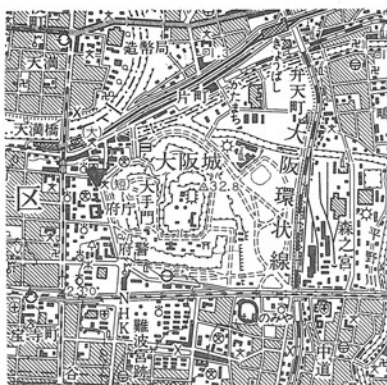
(三宅正浩)

## 大阪・大坂城三の丸(大手口)遺跡

- 1 所在地 大阪府大阪市東区大手前之町
- 2 調査期間 一九八一年(昭五六)四月～一〇月
- 3 発掘機関 大手前女子学園校地学術調査委員会
- 4 調査担当者 藤井直正
- 5 遺跡の種類 近世城郭跡
- 6 遺跡の年代 安土桃山時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

大坂城は、天正十一年(一五八三)豊臣秀吉によって築城が開始されたが、慶長一九年(一六一四)の大坂冬の陣、翌元和元年(一六一五)の大坂夏の陣によって落城した。その後、元和六年(一六二一)徳川幕府によって再建されたのが現在にのこる大坂城の遺構である。豊臣時代の大坂城は、本丸・二の丸を中心に、その外側には広大な三の丸の地域がひろがっていたが、現在では市街地となっている。

従来、三の丸にふくまれる地域において木簡の出土例があり、一九八〇年(昭五五)には、外濠の北側に当たる追手門学院大手前高等学校・中学校の敷地からも、発掘調査によって六点が出土し、これについては「大坂城三の丸(京橋口)遺跡」として本誌第二号に報告した。今回の調査でも新たに木簡一二点が出土した。



(大阪東北部)

今回調査を行なったのは、大阪市東区大手前之町に所在する大手前女子短期大学の敷地で、校舎の増築に当たり建築面積五五〇㎡について全面発掘調査を実施した。調査区域の北側約三分の一は原地形が高く、南方に向かって漸次下降し、現在の地表面下約三m乃至三・五mのところに、敷地全面にわたって厚さ四〇cm～五〇cmの包含層を検出した。この中には、豊臣時代大坂城所用の金箔瓦のほか、多数の屋瓦片、土器・陶磁器・木製品を包含していた。これを除去すると上町台地の基盤層に達し、層中に喰い込んで六つの土壙（SK〇一～六）を検出した。土壙中にも多量の遺物を包含していたが、これらの土壙は、京橋口と同様、大坂落城時にはじまる整地の際して不用品を投棄するために掘られたものであり、包含層も整地に伴うものと考えられる。その上約二・五mにわたって盛土があり、その上面が再建大坂城の地表面である。

木簡は十二点出土し、その他に墨痕のみとめられる木片三点がある。これを遺構別にするとSK〇三が四点、SK〇五が二点、のこりの六点は包含層中から検出した。な

お別に、包含層中から検出した径一四・二cmの円形の曲物の蓋があり、二行の墨書がみとめられる。一行は「志ろさ□」と判読できるが、もう一字は判読できない。

#### 8 木簡の釈文・内容

出土木簡十二点のすべてに墨書がみとめられるが、判読は容易でない。釈文には奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部のご助力を得た。

(1) ・「く九十六」

・「く九十六」

60×16×2 032

(2) ・「一両□」

・「□」

104×28×1 051

(3) ・「門宗八」

・「喜」(熊カ)

(90)×19×2 081

(4) ・「ひ二□□の□□□□」

・「下□□銀」

78×13×2 011

(5) ・「奉書 七束之内 今四」

